

此矛、又は、天の逆戈（さかほこ）とも、天魔返（あまのさか）ほこともいへり。

二神、このほこをさづ（授）かりて、天の浮橋の上にたゞずみて、矛をさしおろして、かきさぐり給しかば、滄海（あをうなばら）のみありき。

そのほこのさきよりしたたりおつる潮（しほ）、こりて一（ひとつ）の嶋となる。

これを馭盧嶋（おのごろじま）と云ふ。

此名に付（き）て秘説あり。神代、梵語（ぼんご）にかよへるか。其所（ところ）もあきらかに知（しる）人なし。

大日本（やまと）の国、宝山（ほうざん）なりと云（く）伝（く）でん（あり）。

二神、此嶋に降居（くだりまし）て、即（ち）国の中の柱（みはしら）をたて、八尋（やひろ）の殿（との）を化作（げさく：仮におつくりになって、日本書紀には「見立てて」とある）して、ともにす（住）み給。

さて、陰陽和合（わがふ）して夫婦の道あり。

此矛は、伝（へて）、天孫、したがへて、あまくだり給へりとも云ふ。

又、垂仁天皇の御宇に、大和姫の皇女、天照太神の御をしへのまゝに国々をめぐり、伊勢国に宮所（みやどころ）をもとめ給し時、大田の命と云神まゐりあひて、五十鈴の河上に靈物（れいもつ）をまぼり（守り）おける所を、しめし申ししに、かの天の逆矛・五十鈴（あめのみや）の凶形（づぎやう）ありき。

大和姫の命、よろこびて、其所をさだめて、神宮をたてらる。

靈物は、五十鈴の宮の酒殿（さかどの）に、をさ（納）められきとも。

又、滝祭（たきまつり）の神と申は、龍（りゆう）神なり、その神あづかりて、地中に、をさめたりとも云（い）ふ。

一（ひとつ）には大和の龍田（たつた）の神は、この滝祭と同体にます。此神のあづかり給へる也。

よりにて、天柱国柱（あめのみはしら、くにのみはしら）と云（い）ふ御名ありとも云（い）ふ。

昔、馭盧嶋に持くだり給しことはあきらか也。世に伝（ふ）と云事は、おぼつかなし。

天孫のしたがへ給ならば、神代より三種の神器のごとく伝へ給べし。

さしはなれて、五十鈴（の）河上に有けんもおぼつかなし。

但（し）天孫も、玉矛者（は）みづからしたがへ給（ふ）と云事、見（え）たり（古語拾遺の説なり）。しかれど、矛も、大汝の神のたてまつらるゝ国をたひらげし矛もあれば、いづれと云事を、しりがたし。

宝山にとゞまりて、不動のしるしとなりけんことや正説（しやうせつ）なるべからん。龍田も、宝山ちかき所なれば、龍神を天柱国柱（あめのみはしらくにのみはしら）といへるも、深秘の心あるべきにや。

凡そ、神書に、さまざまの異説あり。日本紀・旧事本紀・古語拾遺等にのせざらん事は末学の輩ひとへに信用しがたかるべし。

彼（の）書（日本紀・旧事本紀・古語拾遺）の中（うち）、猶、一決せざること多し。況（いはんや）異書（日本紀・旧事本紀・古語拾遺以外の書）におきては、正（しやう）とすべからず。

かくて、此二（ふたはしらの）神（伊弉諾、伊弉冉二柱の神）、相はからひて八（やつ）の鳴をうみ給ふ。

先（まづ）、淡路（あはぢ）の州（しま）をうみます。淡路穂之狭別（あはぢのほのさわけ）と云（い）ふ。

次（つぎに）、伊与（いよ）の二名（ふたな）の州（しま）をうみます。一身（ひとつのみ）に四面（よつのおも）あり。

一（ひとつ）を愛比売（えひめ）と云、これは伊与也。二（ふたつ）を飯依比売（いひよりひめ）と云、是は讃岐（さぬき）也。三（みつ）を大宜都比売（おほげつひめ）と云、これは阿波（あは）也。四（よつ）を速依別（はやよりわけ）と云、是は土左（とさ）也。

次（つぎに）、筑紫（つくし）の州（しま）をうみます。又、一身（ひとつみ）に四面（よつのおも）あり。

一（ひとつ）を白日（しらひ）の別（わけ）と云、是は筑紫（つくし）也。後に筑前・筑後と云ふ。二を豊日別（とよひわけ）と云、これは豊（とよの）国也。後に豊前・豊後と云ふ。三を昼日別（ひるひわけ）と云、是は肥の国也。後に肥前・肥後と云ふ。四を豊久士比泥別（とよくじひねわけ）と云、是は日向也。後に日向・大隅・薩摩と云

（筑紫・豊国・肥の国・日向といへるも、二神の御代の、始の名には非（ざ）る歟（か））。

次（に）、壱岐（いき）の国をうみます。天比登都柱（あめのひとつはしら）と云ふ。

次（に）、対馬の州（しま）をうみます。天之狭手依比売（あめのさてよりひめ）と云ふ。

次（に）、隠岐の州をうみます。天之忍許呂別（あめのおしころわけ）と云ふ。